

文法研究と文型研究

—日本語教育文法を視野に入れて—

田中 寛

要 旨

小文では日本語教育に必要とされる文法研究のうち、とくに文型研究、文型教育のありかたについて有益な議論をおこなうものである。昨今、提唱される日本語教育のための表現文法、あるいは教育実践文法とよばれるもののなかでの位置づけも同時に考える。まず、これまでの文型研究を俯瞰したのち、文型教材の主要なものについて検討し、いくつかの問題点を指摘する。さらに、構造と意味の両面からとらえた機能文型としての骨組みを提示し、内外の文型教材の需要などをふまえながら、体系的な構図とといったものを想定する。語彙にもシソーラスがあるように、科学的な分類による文型水準、シソーラスといったものの模索、構築の一步とする。

【キーワード】文型 教育文法 文型教育 文型シソーラス 複合辞

目 次

1. はじめに
2. 文法と文型、研究と教育の関係
3. 「基本文型の研究」と「話しことばの文型」
4. 「日本語表現文型」と「複合辞」
5. 中国における日本語文型研究
6. 機能文型の検討
7. おわりに

1. はじめに

このところ、日本語文法の研究において日本語教育に密着した実践教育文法への取り組みに関心が高まっている。理論的な日本語学から実践的な日本語教育学への橋渡しを意図するものとして、技能別における文法教育、教育文法といった模索もある¹⁾。

文法研究の切り口はさまざまであろうが、日本語教育との接点を考えると自ずと文型研究と切っても切れない議論になる。教育文法もこの「文型」をどう扱うかという意識から離れることはできない。そして実践的な視点から見れば、文法も文型も最初からあ

るのではなく、それを獲得し、習得していく過程で、形式（構造）、意味、機能という総体的なものとして把握される。あるいは部分的なものから全体的なものへの認識の拡張でもある。外国人学習者にとってはこの事情はいっそう顕著で、初級から中級にいたるまで、単語をいくつ覚えればいいのかという理屈と同じように文型をいくつ覚えればいいのか、という目標が暗黙のうちにある。こうした事情を背景に、日本語教材の中にも作文、あるいは文章表現や文法の副教材としての文型教材が少なからず想定され、また、その主要なものについては類義的な分析も含めて相当深いところまで進んできている。

一方、日本語能力検定試験対策として、各種の文型学習書が出されている。それらは用例も詳しく、類義文型、対立文型なども収録しているが、分類には相当の異同もあり、選択の基準もあいまいなところもある。とはいえ、ひとつとは異なった文型研究の「場」が蓄積されてきたことは事実であろう。問題はこれらの長所短所をどう連合し、実りある文型研究に結び付け、学習者に還元していくか、である。小文はその予備的な報告である。

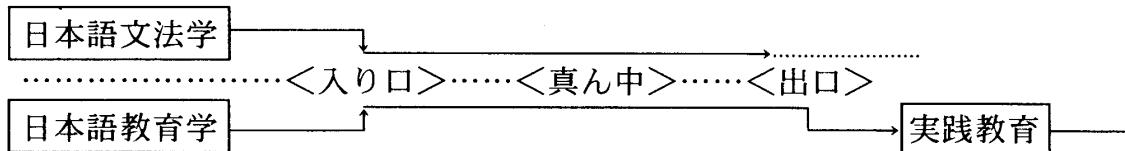
2. 文法と文型、研究と教育の関係

「文法」とは文のしくみであり、そのシステム、構造と生成をめぐる考察が文法研究にはかならないが、一方、それらが実際の発話、文脈という場、環境でどのように扱われるか、という研究も実は内包されていなければならない。ところが、これまでの文法研究の意識は外部との接触が希薄なところが大きく、もっぱら言語の内在性に焦点をあてた閉じた研究、つまり教育体系とは無関係、無目的な研究が進められてきたきらいさえある。それも長いスタンスから見れば貢献の要素は少なくはなかったのだが、昨今の教育、意識のグローバル化から、ここまでは<文法>の領域、ここからは<教育>の領域といった線引きが実効性をもたなくなっているのも事実である。いたるところ、研究と教育の連携が模索されているように、文法の世界においても例外ではない。

淵源をたどれば、シンタクスの研究は言語学の関心で、そのそれぞれの具現的な領域については現場の教師が「料理」すればいい、といった無意識的な区分け、分業がなされてきたところに、問題の本質があったように思われる。たとえば<入り口>、<真ん中>、<出口>といったスペースを考えると、<入り口>の部分は共有されているのに、その中身<真ん中>の大半は研究領域が占め、<出口>の実践論にいたっては研究は“われ関せず”、といった風潮がなきにしもあらずであった。日本語学の研究文法、理論文法は、日本語教育学の実践文法、教育文法との接点は点として、大方の過程は並行的であったといえよう。また、往々にして日本語教育の前線に位置する教師は問題意識は旺盛であっても、当面の問題解決の作業に時間と労力を費消されることも多く、現場での関心、発見がうまく研究指向にむすびつかないという事情がある。日本語学研究にしても日本語教育の副次的な成果で、継続的な研究活動には「公私の」制約がある。教師はいわばオールラウンドプレーヤーなわけで、常に全体を見る立場から、一箇所の文法研究からはどうしても距離をおかざるをえなくなってしまう。一方の研究サイドか

ら見れば、理論的な構築を実際の言語使用のなかで攪拌することが環境的にも困難である。昨今は日本語学の研究から日本語教育に進む人たちも多くなったが、現場の大方の教師は教育的な視角から研究を視るという立場にあるのではないだろうか。こうした需要を考えないと、表現文法の骨格自体が往々にして定まらなくなる。ちなみに、【図1】は両者の実存をあらわしたものである。

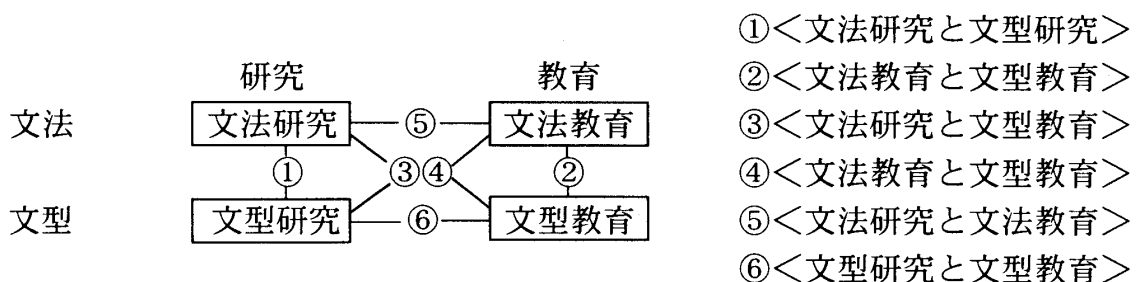
【図1】 <入り口>、<真ん中>、<出口>



日本語文法学の貢献はその<真ん中>において接点を持つような意識を高める必要があるが、その一つに文型研究の共有があげられる。

ところで、【図2】は<文法>、<文型>という対象、<研究>、<教育>という取り組みの連関を考えてみたものだが、それぞれへの関心は深められても、例えば①<文法研究と文型研究>、②<文法教育と文型教育>について、さらに四項の組み合わせによっては③<文法研究と文型教育>、④<文法教育と文型教育>といった連関性については、あまり論じられることがない。文法、文型それぞれの内部での研究⑤<文法研究と文法教育>、⑥<文型研究と文型教育>にいたってはなおさら議論の場は自明のものとして不毛なものになってはいはしまいか。また、この構図を日本語学、国語学を対象とした場合も、自ずと指向性は異なってくる。

【図1】 文法、文型と研究、教育の連関性



もっともこれらの四項のなかには明確な境界線が引きにくく、暗黙のうちに相互乗り入れのようなことを実践していることも事実である。また、「研究」が上位概念で、「教育」が下位概念であるといった観念は根強いものがある。とりわけ言語学の一部の研究者にそうした風潮が見られることは、研究自体を閉鎖的なもの、不幸なものにしているといえよう。

筆者は日本語教育に長年従事しながら、文型教育のありかたについて少なからず関心をもってきた。当然ながら、長く日本語教育に携わってきた教師であれば、“最初に文

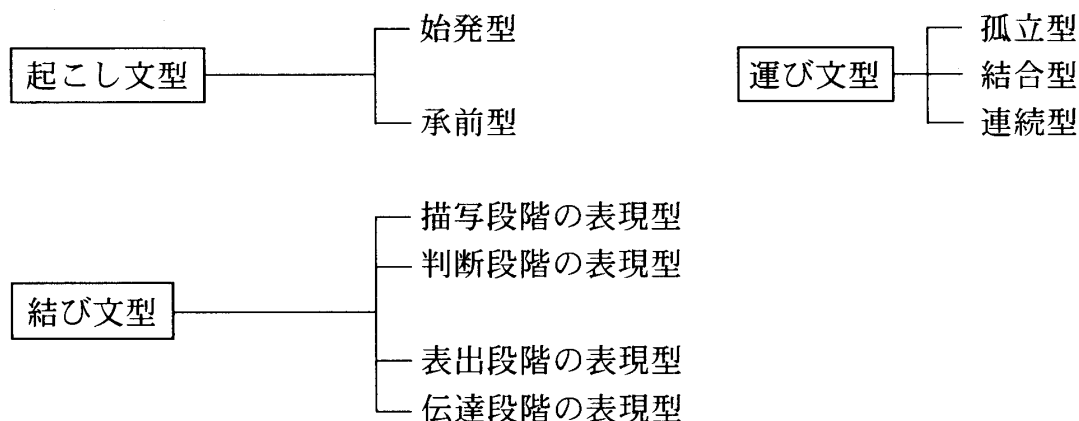
法ありき”ではなかったはずである。また、筆者はかつて中国で日本語教育に携わったとき、「慣用型」と題した研究書、学習書が多く出されていることに関心をもったことがあるが、それは主として理工系日本語教育において、技術書の翻訳からの具体的な需要に発したものであった。それらの成果から、また自ら外国語を学ぶ際に、効率的な文型集があれば、という率直な感想ももたれたのである。文型研究はこうして、むしろ外国人研究者において高い関心がうかがわれるように思う。

文型はまた言語の発想形式としても関心が持たれる。とくに語順についての観察などは言語間のさまざまな比較対照の視点を提供するはずである。以下ではこうした関心から、日本語教育における文法研究と文型研究という観点から日頃気になっている点を述べてみることにする。

3. 「基本文型の研究」と「話しことばの文型」

文型に関心のあるものなら必ず手にしたにちがいない、古典的とも思われる二点の成果がある。「基本文型の研究」(林四郎)、そして「話しことばの文型」(国立国語研究所)である。

「基本文型の研究」は「文型」の概念を国語教育のなかではじめて具体的に示したもので、文法書と異なる学習の系統化のための試みが随所に見られる。第2部の「文型の記述」では文型を次のような3種として位置づけた。



さらにこのほかに「局部文型」の分類を設け、「並び」、「注ぎ」、「くくり」の相に分けると同時に、「文勢」に関わる相として副詞などの共起成分とともに「優勢」(プラス指向)、「劣勢」(マイナス指向)とに分類する。また、文型による学習では表現力を養う学習の方法論と可能性が述べられ、文型練習の原型、雛形が示されている。あらためて草創期の労作という感慨をもつのであるが、今日、こうした正面からの文型理論を再構築する必要があるのではないだろうか。種々の試論を含むにせよ、文型教育の面から、「文型」の単位認定の諸条件を検討し、より普遍的な広い枠組みを正面から構築したものといえよう。

「話しことばの文型(1), (2)」は「基本文型の研究」を理論的支柱とすれば、種々の話

し言葉の生きたデータ分析から記述した、より詳細な資料編である。(1)の「対話資料による研究」では具体的には「基礎的研究」に示され、「表現意図に応ずる文表現の文末部分」に注目して、「態」、「様」、「時」、「断定」、「希求」、「推定」、「意志」、「判断未確定」、「疑念」、「確認要求」、「判定要求」、「選択要求」、「説明要求」、「消極的行為要求」、「積極的行為要求」の表現をあげている。また、(2)の「独話資料による研究」では「構文」を「基準構文」と「付加構文」に分け、それぞれの「骨組み」と「拡大」、「複合」について記述している。いずれの資料もイントネーションに多くの頁を費やしている。ちなみに(1)は大石初太郎、飯豊毅一、宮地豊、吉沢典男の各氏が、(2)は大石初太郎、宮地裕、南不二男、鈴木重幸の各氏がそれぞれ担当した。

最近の文法・文型研究の傾向として、地道な例文収集からの分析は姿を消しつつあるのが正直な印象であるが、時代とともに言葉も変わっていくことから、語彙分類集があらたに編集されたように、「話しことばの文型」も当然ながら見直しが必要になってくる。まして今日のように情報伝達のツールが高速化し、多様化する現代では、文の単位、長さ、接続の態様もかつてと大きな変化が見られるのではないだろうか。「から」と「ので」などもそうである。ぜひとも大きなプロジェクトを立ち上げて、現代の「話しことばの文型」の再生、継承発展を望むところである。その際、「スピーチレベル」などの文体的な要素などを考慮に入れることも必要であろう。

一方、学際的な需要を背景に、学術書などの文献を読むための文型研究も重要性を増してきている。理工系、農学系、医学系などの専門別に頻度の高い文型項目の抽出とデータによる記述分類が今後、需要の対象となるであろう。

なお、「基本文型」については、「基礎日本語文型」の記述研究が基本語の記述と同様に考えられる。牧野(1989, 1995)はその試みであるが、さらなる記述、誤用分析も視野に入れた研究が求められる。

4. 「日本語表現文型」と「複合辞」

文型研究は日本語教育の発展、教材研究のなかで進められてきた。したがって文型を基軸に文法を論ずるのは、教学文法、教育文法の性格である。実際の教育現場の必要に応じて、頻度の高いもの、誤用の傾向の顕著なものが研究、考察の対象となってきた。ここではそのピークとともに、特徴を三点ばかりにしぼって検証する。

4-1 「日本語表現文型」の登場

1980年代で最も多く使用され、いまなおそれを越える類書がないと言われるのが「日本語表現文型」(中級1, 2)である。二冊ともほどよい長さの読解文があり、その中に提出文型が用例とともに解説されている。主編者の寺村秀夫のアイデアが素朴ながらきわめて実用的な項目の配列で提示されている。これは中国でも翻訳され、版を重ねている。残念なことにこの続刊(上級編)は出ておらず、より体系的な分類も中断されたままである。参考までに目次の項目を挙げておく。

『中級Ⅰ』

1. 名・分類・定義、2. 存在・位置、3. 存在・数量、4. 移動、5. 変化、6. 過程・推移・経過、7. 時の表現、8. 要求・依頼・命令、9. 希望・願望、10. 意志、11. 申し出・勧め・誘い

『中級Ⅱ』

12. 類似・比況・比喩、13. 比較、14. 程度、15. 対比、16. 伝聞、17. 予想・予感・徴候、18. 予想・期待の実現と非実現、19. 原因・理由(1)、20. 原因・理由(2)、21. 逆接

「表現文型」という名称がこの出現で定着したといってもよい。主要な文型をあげ、比較的短い生の文章を収録するといった構成は斬新で、以後の日本語教育に大いに貢献した。上級向けの続編が望まれる次第である。

その後、森田良行・松木正恵「日本語表現文型」が名を同じくして出版された。永野賢の認定を現代的な研究角度から拡張してさまざまな準複合辞的な要素までを検分したことは、日本語教育に対する大きな貢献であったといえよう。友松他(1996)などに継承されながら、その後も「表現文型」はあるときには「機能文型」と名称を変えながら改変、進化をとげている。また、辞書の項目としてあげられない文中表現については河原崎他(1995)なども出された。より精選された例文と明快な解説、文型検索の方途などをめぐって、研究の進展がのぞまれるところである。

4-2 「複合辞」という文型カテゴリー

日本語教育の世界に「複合辞」という文法カテゴリーが登場したのも「表現文型」とほぼ同時期である。雑誌「日本語学」が複合辞を特集したのは1984年秋であった。初級文型からの発展段階を意味づけるのに好都合なこの複合辞は、種々の選択、成立基準を見直しながら、その裾野を広げてきた。これまでの構造文型による分類から、機能主義によって用途、表現別に区分けされた文型が実践的なものとして開拓されていった。また、後置詞あるいは複合格助詞などへの関心も高まり、いわゆる<XをYに>文型の発掘なども精力的になされた。今後はこれらの“小さな”文型をどう分類するか、である。形態的、構造的な特徴からこれを整理し、水準1、水準2などのように級別の使用別ランク付けも教育上は必要かもしれない。現在、未刊行物であるが、「現代語複合辞用例集」は接続相当複合辞、助動詞相当の複合辞に大別し、実際の用例を多く取り入れたもので、言語データとしても有益である。ただ用例数は限られている。近年中に加筆訂正の上、刊行が期待される。巻末には複合辞研究の文献目録を収める。類義文型などの研究も類語研究と平行しながら、発展していくことが望まれる。なお、この方面ではむしろ日本よりも隣国、韓国、中国(後述)などでの実用文法の取り組みから意欲的に取り組まれている現状を記しておきたい。

4-3 「日本語文型辞典」

1990年代の後半に登場した「日本語文型辞典」は各種日本語教科書の提出文型を網

羅し、そのほか初級、中級文型を加えた画期的な用例辞典であった。解説も外国人学習者にもわかる説明であるが、循環的な説明、抽象的な説明、言い換え説明に終わっている箇所もある。また、文末に呼応する副詞なども収録していて、文型の基準も多様化している。中国語、韓国語訳なども刊行され、日本語教育にも貢献したところが大きい。

このほか富田(1997)は収録文型数こそ少ないが、類義文型などの解説は知見に富んでいる。なお、現在試用版を含めて、早稲田大学日本語研究教育センターではこうした文型教材の開発に数年前から着手している。レベル別、また社会科学、人文科学分野にも有益な読解文型を数多く含むものとして、今後のいっそうの調査研究が進むことが期待される。

ただ、例文の構成はやはり「作られた」イメージが強く、実際のデータも加えながら、より自然言語、自然語彙に近いものにする、また日本語による説明も明快になると同時に、類義文型、対立文型などの情報、といった工夫が望まれる。

5. 中国における日本語文型研究

筆者はかつて中国における文型教材を紹介する文章を書いたが²⁾、それ以降多くの文型教材、研究書、学習書が刊行されてきた。これは中国における日本語研究の高まりと軌を一にしているが、ここでは比較的精度の高い三点をあげておこう。

1) 王銳編著(2000)『日中対照 日語慣用型詳解』 中国北京、世界図書出版公司

日本語能力検定試験準拠の学習書として、文型収録数は約1000である。過去の出題問題からも広く収集している。左右対照の対訳は参照しやすく、また例文も精選されている。接続の説明もできるだけ詳しく説明している。索引も接続関係などを明示し、学習の便を考えている。ただ、「XをYに」などの項目はいささか少ない印象が持たれる。動詞の後置詞「をめぐって」に順ずるグループパターンについても類例が少ないのが欠点である。

できれば頻度、習得・出題レベル別の印などがついていれば、参考になるだろう。

2) 劉桂雲、常波濤主編(2002)『標準日語慣用句』(上・下冊) 大連理工大学出版社

上下巻とも合わせて収録文型数は1693を数える。解説と例文のほかに類義文型などの参照指示がないのが惜しまれるが、項目の多さでは群をぬいている。たとえば「ところ」については次のような具合である。分類意図がやや不透明な箇所もある。

「ところ」①、「ところ」②、「どころか」、「ところから」、「ところだ」、「ところだった」、「ところでは」、「ところではない」、「ところは～と～って似ている」、「ところに」、「ところによると」、「ところへ」、「ところまでいく・くる」、「ところによると」、「ところを」、「ところをみると」、

また、項目の中には文型とは別の「副詞」語彙などもないわけではない。

3) 劉曉華、羅麗僕編、蔡全勝監修(2003)『日漢双解用法例解 日語近義句型分析』
大連理工大学出版社

日本語類義文型の使い分け辞典である。53の項目に分類し、それぞれ「接続」、「意義」、「用例」、「分析」の解説がある。しかし「と思ったら」と「かと思ったら」などについては「分析」の解説がない。「というものではない」「というものでもない」などについても用例のみに終わっている。とはいえ、日本人研究者には気付かない比較研究も少なくなく、用例の対訳も有益である。総数は498をかぞえる。なお、姉妹編として次の「日本語類義語の使い分け」の労作がある。

呉雲珠、関薇、胡欣、張録賢編、三浦直樹監修(2003)『日漢双解用法例解 日語近義詞分析』 大連理工大学出版社

このほかにも台湾、韓国で出された日本語教材のなかにも文型関連の教材、学習書が少なくないと思われる。ぜひ、そうした紹介がなされる場がほしいと思う。

6. 機能文型の検討

ところで、今日の文型研究をひとつの研究分野として考えた場合、筆者は<文型学>、あるいは<文型論>といったものを提案したいのだが、そのきっかけとして佐久間(2002)で提示された機能文型の分類を紹介し、内包するいくつかの問題を瞥見してみることにしたい。佐久間(2002)はその二年前にほぼ原型が整えられ、数度の改訂を経て、現在のものに至っているが、将来部分的な修正が行われるものと思われる。小文は筆者から見た検討にすぎないことを断わっておく。

まず、一覧をあげることにする。

(a. 実質(内容)機能 b. 構文(文法)機能 c. 講話(文章・談話)機能)

- | | | | | |
|----------------|-----------|-----------|-------------|-----------|
| 1. 場面 a.1 | 1-1 時間 | 1-2 瞬間 | 1-3 同時 | 1-4 前後・順序 |
| | 1-5 完了 | 1-6 推移・経過 | 1-7 契機・きっかけ | |
| | 1-8 空間・状況 | | | |
| 2. 程度・範囲 | 2-1 程度 | 2-2 範囲 | | |
| 3. 並列 a3/c1 | 3-1 付加 | 3-2 列举 | 3-3 例示 | |
| 4. 対比 a4/c2 | 4-1 比較 | 4-2 選択 | 4-3 限定 | |
| 5. 事態 a5/b1 | 5-1 自発 | 5-2 習慣 | 5-3 傾向 | 5-4 対応 |
| | 5-5 受身 | 5-6 使役 | 5-7 可能 | 5-8 経験 |
| | 5-9 試み | | | |
| 6. 話題 a6/b2/c1 | 6-1 提題 | 6-2 前提・立場 | 6-3 引用 | |
| | 6-4 転換 | 6-5 まとめ | | |
| 7. 判断 a7/b3 | 7-1 肯定 | 7-2 否定 | 7-3 推量 | 7-4 様態 |

- | | | | |
|------------------|-----------|-----------|-----------|
| | 7-5 比況 | 7-6 説明・解説 | 7-7 評価 |
| | 7-8 不可抗力 | 7-9 当為 | |
| 8. 表出 a8/b5 | 8-1 感想 | 8-2 希望 | 8-3 意志 |
| 9. 働きかけ a9/b5 | 9-1 提案 | 9-2 要望 | 9-3 許可・禁止 |
| | 9-4 疑問・反語 | 9-5 勧誘 | 9-6 依頼 |
| | 9-7 命令 | 9-8 主張 | |
| 10. 順接 a10/b6/c2 | 10-1 因果 | 10-2 結果 | 10-3 根拠 |
| | 10-4 目的 | | |
| 11. 条件 a11/b7/c3 | 11-1 順接条件 | 11-2 逆接条件 | 11-3 否定条件 |
| 12. 逆接 a12/b8/c5 | | | |
| 13. 敬語 a13/b9/c5 | | | |
| 14. 指示 a14/c6 | 14-1 場面指示 | 14-2 文脈指示 | 14-3 その他 |
| 15. 形式名詞 a15/b10 | 15-1 コト | 15-2 ノ | 15-3 モノ |
| | 15-4 その他 | | |
| 16. 手段・方法 a16 | 16-1 手段 | 16-2 方法 | |

1. から 16. までの配列は恣意的で、どれを最優先にというわけでもない。またこのなかには複文文型といったものも多く分散している。

たとえば「場面」とは具体的に次のような文型をさす。以下、前件、あるいは後件のみ示す。レベルとしては中級相当の学習者である。

「非常の際は／一口飲んだとたんに／年をとるとともに／一言言うなり／何か言いかけて、…

同じく、「程度・範囲」とは次のような文型である。

「知名度において／親の保護のもとで／今日を限りに／東北から北海道にかけて／四季を問わず／雨の日をのぞいて／広い範囲にわたって、…

「並列」とは次のような文型である。

本人は言うまでもなく／風邪を引いているうえに／女性に限らず／人の目もかまわず／人件費の高騰に加えて／歌も歌えばダンスも／泣くやらわめくやら／夏は海、冬はスキーといったように、…

なお、このなかには「人の目もかまわず」のように慣用的な副詞句となったものもある。さまざまな「並列」のタイプを構造的にも意図別にもどう分類するのか、未定である。

また、「対比」とは次のような文型である。

「手伝う」というよりはむしろ「邪魔をしている」といったほうがいい。
別れるくらいなら死んだ方がいい
以前とはくらべものにならないほど、
文句を言うわりには、
体を壊してまで働く必要はない、
病院に勤める一方で／収入が増える半面

ここでも「以前とはくらべものにならないほど」のような定型的な副詞句がある。「事態」とは次のような文型をさす。

注文に応じて／子ども一人につき／十分にありうる、

「話題」（主題、命題）とは次のような文型である。表現意図にそった用法の弁別についての説明はほとんどまだなされていない。

温泉というと／ローンといえば／遅刻したにしては／人生とは／パチンコなんか／千葉県を中心に／留学生の立場からいうと／親として／介護を目的とする／井出とか飯田とかいう／合格されたとのこと、

これらのなかには「とのこと」などのように、待遇的な要素をどう扱うかという問題がある。また「話題」という立て方自体に異議はないが、意味としては「という」とは「連想」、または「類推」を意味する場合もある。分類に当たってはなお検討を要するところが少なくないと思われる。

7. おわりに

文型には接続部分だけにあらわれるもの、文末形式にだけあらわれるもの、さらに前件と後件にも呼応するように共起する成分といったものもある。また語形などにも注意すべきである。このように、一部をあげたにすぎないが、研究者の合理的な整理と学習者側、使用側から見た需要とは完全に利害が一致しているわけではない以上、ある程度の重複的な提出はやむをえない。カジュアルな文型もあれば、非常にフォーマルな文型といったものもある。敬語を文型としてどう位置づけるかも明確な議論が必要なところである。

以上の考察から、最後に文型研究のこれからを考え、ある提案をしてみたい。

今後も文型教材の需要は高く、多面的な研究と同時にあらたな分類基準をめぐって模索が続いていけよう。また、母語別対照の文型集などの編集も進むにちがいない。すでに各方面での活動もあるだろうし、ぜひそうしたニーズを高めていきたいものと思う。また、英語、中国語を始めとした諸外国語の文型教育、文型シソーラスの作成実情なども大いに啓発を受けるところである。さしあたって文型研究の成果、学習書文献リ

ストなどの整備が必要であろう。

もうひとつ、筆者の関心でいえば「複文文型」に関する文型研究である。あるいは呼応文型、多項目連文文型といったものである。たとえば、「たら」と「から」の接続・連動、共起するといった文型（「ブザーが鳴りましたら重量オーバーですから、ご乗車にならないでください」など）である。田中(2004)では各論において複文をめぐる文型のいくつかを詳述している。副詞を機能語としてどう位置づけるかも意見の一致しないところでもある。説明文、学術論文、報道文などに見られる文型調査もこれからの課題である。

加えて、接続を重視する一方で、文末形式の新しいカテゴリー分類も必要なように思われる。たとえば否定文末文型といったもの、文末名詞文型といったものである。さらに、「後置詞辞典」、「形式名詞辞典」、あるいは「間投詞、終助詞辞典」といった各種用例辞典も、翻訳などに従事する側としては需要が大きいにちがいない。

同時にここで述べたようなジャンル別の拾遺、分類作業と並行して、個々の文型に内在する文法現象のさらなる記述研究が求められることは言うまでもない。

【注】

- 1) 2003年度日本語教育学会秋季大会のシンポジウムテーマは「新しい日本語教育文法—コミュニケーションのための文法をめざして—」であった。だが、実際の参加者の中からはこの体系化には種々の期待の声と同時に、種々の困難があることも議論された。
- 2) 1995年当時まで中国で刊行された主要な文型研究を約20数点とりあげ、比較分析した。中国における文型教育の需要と教学の実情についてもふれている。

【参考文献】（年代順に）

- 国立国語研究所(1960)『話しことばの文型(1)—対話資料による研究—』国立国語研究所報告18 秀英出版
- 林四郎(1961)『基本文型の研究』 明治図書出版
- 国立国語研究所(1963)『話しことばの文型(2)—独話資料による研究—』国立国語研究所報告23 秀英出版
- 筑波大学日本語教育研究会(1983)『日本語表現文型中級Ⅰ、Ⅱ』 凡人社
- 森田良行、松木正恵(1989)『日本語表現文型—複合辞の意味と用法—』 アルク
- 牧野成一、筒井通雄(1989)『日本語基本文法辞典』(英文解説書) ジャパンタイムス
- 牧野成一、筒井通雄(1995)『日本語文法辞典(中級編)』(英文解説書) ジャパンタイムス
- 河原崎幹夫(1995)『辞書で引けない日本語文中表現』 北星堂書店
- 友松悦子他(1996)『どんな時どう使う日本語表現文型500』中上級 アルク

- 富田隆行(1997)『続・基礎表現50とその教え方』凡人社
- 池松孝子(1997)『「あいうえお」でひく日本語の重要表現文型』専門教育出版
- 田中寛(1998)「文型教材の構成と項目の選定—中国の日本語文型教材を例に—」『講座日本語教育』第31分冊 早稲田大学日本語研究教育センター
- グループジャマシィ(1998)『教師と学習者のための日本語文型辞典』くろしお出版
- 山崎誠、藤田保幸(2001)『現代語複合辞用例集』国立国語研究所(非売品)
- 佐久間まゆみ・川本喬(2002)『日本語文法6 B2002年度秋学期』早稲田大学日本語研究教育センター(試用版内部資料・非売品)
- 田中寛(2004)『日本語複文表現の研究 接続と叙述の構造』白帝社